

2013. 12月

NPO法人環境カウンセラーズ京都 金田由紀夫

ユネスコ委員会で、
1990年と翌1991年の環境都市となったエアランゲン市（バイエルン州）に短期滞在。
市民の意向を束ねた行政と、街の誇りを深めている市民活動を勉強し体感してきました。

都市の規模：人口 10万6000人、面積 77万平方キロ、医療産業と大学の街
外国人市民は、約140カ国から、15%を占める。

<留意点：写真は、別途掲載>

(1)環境都市の看板となった市民の誇りとは、何でしょうか？

① 自転車専用道 (写真 E-1)

Bicycle roads

1972年から24年間、ハールベーク市長の下、人間と環境との共生をスローガンとした市政が環境整備の実績に結びついた。人間らしい都市を創る理念の一つとして自転車道があった。歩行やバギー、自転車、自動車が各々最適な速度で安全に移動できる『平等な交通システム』の構築を目的とした。

・19世紀の工業化は、都市密集化と自然破壊をもたらした。…その反動が、人間と自然との調和を求める形になり、自然保護と郷土愛に結びつき人間中心の方策を生み出す。

②自然との調和 (写真 E-2, E-3)

Green in Erlangen

「赤頭巾ちゃん」などドイツ童話は、森がよく舞台となる。国土のおおよそ3割程が平地の森であるせいか、街と森は地続きである。人はターザンの生活に馴染まない。使える自然にして初めて、人にとっての利用価値となる。

「眠れる森の美女」なり「白雪姫」などの物語にも、放置された森が脅威である様子が伺われる。

安全な自転車道とつながる35万平方キロの森が市街を囲むようにあり、週末になると家族や孫を連れだした三世代の楽しむ姿が当たり前のように見られる。

(2)緑の産地地産で、自然環境との共生を実現できるのは、本当でしょうか？

①緑のインフラ事業 (写真 E-4)

Infrastructure improvement

コンポストセンターと呼ばれるリサイクルシステムがあり、森を整備した時に不要となった間伐材、枝葉や庭木ゴミを収集→粉碎→攪拌→堆肥化販売→自然還元している。

250年ほど前から州は、森の管理をしており「森はドイツの生活に欠かせない」存在となっている。

②森を大切に作る市民姿勢と法令 (写真 E-5)

Forest Conservation maintenance and law

2002年 市政千年記念で千本の植林、2007年以降は緑化継続推進で街路など市中には、45,000本以上の樹木が茂り、豊かな生物多様性を育む環境風土となっている。尚、周囲80cm以上の倒木には、許可と跡地植林での市民義務が課されている。

③市民庭園ークラインガルデン (写真 E-6, E-7)

Citizen garden

菜園化、芝の植え込み、雨風よけと休憩場所となる小屋建設も可能であり、四季折々の使用方法で楽しむことができる小ぶりの借地が街中に十数か所あり。

この始まりは、19世紀まで遡る。当時、工業化と人口増加で労働者や一般市民の環境が悪化し、喧騒も膨らんだ。その対応策として生まれ、今や生活の質を向上させる特筆する存在でもある。

・経営のNPO代表 コット・フィールドさんと借用されている方(写真家)から伺えた。

☆総面積:約50m x 150m

☆契約:期間無期限、庭。畑からでたゴミの堆肥化義務

☆一区画:10m X 10m 賃料 160ユーロ/年

☆休憩小屋建設の概算費用: 2m X 2m 2,500ユーロ

(3)環境都市は、なぜ実現されたのでしょうか？
その背景は?? 次の2点の要素にあります。

①労働時間の法規制を实践

6時間平均/日の勤務時間+職住近接の職場環境が余暇時間を生み、NPOやクラブなどの社会活動への参加を常とする生活形態となっている。学校や職場が唯一、最優先となり勝ちな蛸壺型日本の社会構造とは根源的な違いを感じた次第である。

個人主義社会での連帯感や、愛郷心は普段から社会活動に参加する生活から形作られたと分析される。社会の仕組みや概念というより、社会で共有する価値観を市民間で相互確認が出来る高い感性レベルが習慣風土となっている。(キリスト教の道義がベースにあると感じた)

②行政の社会的責任

ドイツの地方自治行政では、異部門への人事異動が基本にない。職員はそれぞれ専門分野で経験・技量を重ねた行政機能を背負うプロであり、市民へのリーダーシップを発揮する機構となっている。組合も職務毎で組織されている。

エアランゲン市には、『インフラ供給会社』がある。水道・ガス・電気の異業種を一つの会社で運営し、縦割りの専門集団を横のコミュニケーションでの協力・協働体制で黒字経営を継続している。万年赤字の交通局事業も包括している。

最後に、このレポート読んでいただける方々への伝達です。今般の調査と体験は、エアランゲン市に在住するジャーナリスト高松平蔵氏のインターローカルスクールに参加し、環境都市の歴史と時代政策への移行を学び、更に、現場案内とインタビュー実施などで生きた情報と市民の声を直接聞く機会があつて取得出来たものです。

ドイツの情報は、今やネットで手に入りますが、高松氏からはその背景を考えて欲しいと言う事で、ドイツ社会を分析した次のコメントを頂戴しました。

1)ドイツの街は、自分たちで何でも揃えようとする。

その要因の一つは、塀に囲まれた都市づくりの歴史が人工空間には何でもあるべきだと考えたであろうと思われる。

2)ドイツ社会の特徴は専門家・職業社会であり、個人主義

社会という領域に言葉でもって自らの行動・意思を公開する働きが強い(デモ、広報活動等にその行為をみる)

3)エリートという層(教養市民)が生きている社会

教養市民は教育レベルが高い。時間もある。文化的素養も養われている。こういう層が社会運動を興していく。("緑の党"の興隆につながった)

以上